

〈翻訳〉

## A Song for Every Season (2)

湯山健一

### 【3月】

「木立の間伐が終わったら、お次は種まき、  
 ほら、村の連中とつくに畑を鋤<sup>す</sup>き返してるだろ、  
 肩から種箱<sup>たねばこ</sup>下げた男が小麦をまいて  
 あとを馬<sup>ま</sup>鋤<sup>くわ</sup>で埋めていく。悪さをする鳥たちに食われちまわないように。  
 「鋤<sup>すき</sup>の刃」

農村ではありとあらゆる事々が移ろい続けるものですが、例年3月の何れかの時期に訪れる変化はなかでもとりわけ際だっています。というのも、これが、冬の終わりを見定め、新たな一年の作業に取りかかる始まりのときとなるからです。これは、物理的な変容というより感覚的なものと言うべきでしょう。ときには、ある日あるとき突然に感得されることもあります。頃合良く畑仕事の最中これに勘づいたなら、とても大切な時節が訪れたのだときっと悟ることになるでしょう。

年によっては3月初めのこともありますし、逆に下旬にかかることもあります。その到来はまず間違いなくはっきりと感じ取られるものです。これは単に天候が変化するといった類のものではありません。好天に恵まれるということだけなら、その特別なときの到来までも幾度となくあり得るわけですからね。ただそんな好天の日々が、さしたる重要度を思わせることなく

過ぎ去ってしまったているわけです。とにかく、そのままに当日の朝が訪れると、もはや誰に教えて貰う必要もありません。それが前日までと同じ晴れの日でないことはすぐにわかります。大地も海も空も、私たちを取り巻くすべての気が変わるのです。晴天はそうした大きな変化のうちのひとつの要素に過ぎません。朝早く、イースト・ヒルの大きな肩越しに朝日が顔を覗かせると、淡青色の海の鏡を、南から細波さざなみすら立てることなくするすると滑ってやって来た微風そよかぜほどの勢いすら持たぬ暖かな空気かすが微かに流れ込みます。その空気には独特のやさしいやわらかさがあり、大地はあたかも冬の眠りから目を覚ましたかのように、再び深く大きく息を吸い込み始めるようです。遙か南から北上してきた春がイングランドの戸口に立ち、ドアをノックしてなかに招き入れられるのを待っています。大地に霜が降りなくなり、日ごとに日差しが強まって、南斜面の褐色の耕地が焼きたてのパンのように湯気を上げ始めると、そろそろ春小麦の種たね蒔きの支度を始めなければならないと農夫は感じ取るのです。私の父ジムがまだ幼かった頃、種蒔きはまだほとんど手作業で行われていました。6、7人の男たちが畑いっばいに広がり、隅々に至るまでむらなく種を蒔いたそうです。彼らは皆、幅広の革帯で右肩から種箱 (seed-lip) を下げていました。これは、亜鉛メッキを施した容器で、身体にぴったり合うよう曲線で腎臓のような豆型に作られており、外側の縁には、持ちやすいように取っ手が付けられていました。農夫たちは、まっすぐに大股でしっかりと歩きながら、まるで軍隊の行進のような正確さで、左足が前に出る都度、右手で種を蒔いていきました。1歩おきに1握り取っては、指の隙間から、穀粒が偏らずに広がっていくよう蒔いていきます。これは大変な訓練を積まなければ身につけることの出来ない技巧でしたし、またこの作業を首尾良く完遂するためには種々条件が整っている必要もありました。例えば、畑を突風が吹き抜けたりすると、種を均等に蒔くことなどまず不可能なものでした。

ジムの手記にはこうあります。

さて、秋冬（の霜の降りた日以外）は畑に鋤をかけたが、この作業が終わると今度は麦の植え付けに取りかからなきゃならなかった。あの頃は種まき用のドリルなんて代物はなかったから、スキッター・ボードっていう機具を使ってた。回転して穴を掘るドリルみたいな鋤先がついたもんじゃなくて、手前の細長い箱に何本かワイヤーが通ってて、それを動かすとそこから小麦が弾け出し、かごの中に入って地面へ均等にまかれる。オレたちは、小麦をきれいにまけるよう、車輪の5つついたプレスサーで畑を全部ならしたもんだ。農夫ひとりに見習い小僧がついて馬3頭に引かせ、1日5エーカー [訳註 =  $5 \times 1 \text{ acre} (= 4,046.86 \text{ m}^2) = 20,234.3 \text{ m}^2$ ] やった。小麦の種が土の中へもぐり込んでほどよく埋まっていこう、畑に筋を作って行くって作業だ。

スキッター・ボードは2ヤードと4分の3 [訳註 =  $2 \times 3 \text{ feet} + 27 \text{ inches} = 8 \text{ feet } 3 \text{ inches} = 2.5146 \text{ m}$ ] の幅があったから、1往復すれば1ロッド (1 rod) [訳註 =  $5.5 \text{ yards} = 5.0292 \text{ m}$ ] 幅の畑に種がまけた。スキッター・ボードを使って1日でやれるのは12エーカー [訳註 =  $48,562.32 \text{ m}^2 = 12 \times 160 \text{ square rods}$ ] ってとこだった。オート麦の種まきだと、4ブッシェル [訳註 =  $4 \times 1 \text{ bushel} (= 36.367 \text{ litre}) = \text{約 } 145.5 \text{ litre}$ ] ずつ入った袋を15 (合計60ブッシェル)、小麦だと1エーカーにつき5ブッシェルで12エーカー (合計60ブッシェル) 分こなした。これが終わると、馬4頭を横並びにして木製の馬鍬を引かせた。馬鍬は2つ1組に結わえてスキッター・ボードの倍の幅にしてあったから、種まきの農夫は、馬鍬をかけ始める前に1往復終わらしておかなきゃならなかった。馬鍬がけはいつでも同じところを2回ずつやっていくもんだ。だから、畑を端まで行くと今度は種を埋めに同じところを戻ってくる。この往復するやり方を「ウェンティング」って言い、片道しか引かないときには「ティンディング」と呼んだ。まあ、とにかくその15袋をまき終えなくちゃ<sup>うち</sup>家に帰れなかった。全部終わるにゃ12マイルほど歩いてくことだ。

オレたちが食う分の麦は、おんなじやり方で1エーカーに3袋、いつも羊を集めとく囲いの裏にある畑のすみっこにまいてた。あのころ大麦はあんまり作ってなかったから、作付けは春だけだった。オート麦の作付けには遅すぎるってなときにゃ作ることもあったかな。羊たちの放牧用のアブラナ畑 (lambing rape) [訳註 アブラナをむらなく食べさせる

ため畑のなかを柵で仕切り、一区画食べ尽くす毎に柵の位置を移動させて段階的に放牧を行っていた。]のちょいと奥に。4月半ばじゃどう考えたってオートの種まきにゃもう遅えし、結局実が黒く熟し切らずに茶色くなっちゃまって食えねえカッコウ・オートになっちゃまうこともあった [訳註食用には適さず、家畜等の動物に与えられた]。

種がすべて無事に植え付けられると、次の仕事はこれを守るというものでした。ただ、これはさほど簡単なものでもありませんでした。歌のなかにもこんな風に描かれています。

「肩から種箱下げた男が小麦をまいて  
あとを馬鋤で埋めていく。悪さをする鳥たちに食われちまわないように。」

しかし、丘の向こうの隣村スタンマーの塀からギザギザの翼を羽ばたかせて飛来する500羽とも600羽ともつかない黒づくめの盗賊たちは、これとは真逆の見方をしていました。彼らはこの時節になると来る日も来る日も群れを成して私たちの村へ飛来し、種蒔きを終えたばかりの畑に襲いかかりました。この困った外敵の襲来は毎年のことでした。村の池を見下ろすディーン・ガーデンの木立にもミヤマガラスの小さな群れが棲んでいましたが、「スタンマー・パーク」の強欲なミヤマガラスは、数の上でも「ロッティンディーンの地ガラス」のおよそ10倍ほどあり、村人たちにとっては遥かに大きな脅威でした。とてつもなく激しい3月の突風が吹き荒れると、ノミ屋 (bookie) のシャムおじさんはこんな風に言うものでした。「吹っ飛ばせ、ああ、吹っ飛ばんじまったろうよ。あの風でスタンマー・パークのカラス野郎の羽はぜ〜んぶ吹っ飛ばんだな。間違いねえ。これできつとヤツら、歩いて塀に帰ったろうよ」。

こうした作物に対する日々の脅威との戦いは、農夫たちのなかでも主に年長者と少年たちに任されており、彼らは鳥おどし——彼ら自身の言い回しに

倣えば「カラスへの兵糧攻め」——の任務のために畑へと差し向けられ、お手製のクラッパーズという道具をガラガラ鳴らしたり、激しく振ってピシヤリと強い音を出したりしました。これは、クリケット用のバットの形——むしろ(訳者補記)バターを切り分ける木製の)バターパット (butter-pat) のような形状と言うべきか——をした木片の両面に1枚ずつ鳴子となる板をそれぞれ針金で緩く結わえたものでした。最も効果が高いのは、朝一番にこれを用いたときでしたが、時間が経つにつれ、カラスたちは、初め銃声だと思っていた一斉射撃のような音が、一定の間隔で鳴り響いているにも拘わらず自分も仲間たちも誰ひとり傷ついていないことに感づくようでした。どうやら彼らは、鳥おどしの任に当たっているのは、狙撃手としては非常に腕の悪い者であるか、もしくは、賢明にも、これらの音は銃声ではないという結論に至ったようでした。とにかく、カラスたちは徐々に大胆さを増し、鳥おどしに励む農夫たちの努力に報いるかのごとく一応けだる気怠げに空へ羽ばたいて少しばかり旋回はしたものの、すぐさま仕切り直し、再び餌探しに取りかかるばかりなのでした。このような状況は悪化の一途を辿り、終いには、苛立つ鳥おどしの農夫たちが破裂音を出しても、せいぜいすぐ側にいる鳥たちを地面から飛び上がらせる程度の効果しか持たなくなりました。このような困った状況を打開するべく、畑には猟銃を持った男がひとり帯同し、時折狙いを定めて引き金を引いては、カラスたちに独りよがりな思い込みに浸ることの危うさを思い起こさせ、クラッパーズの音に対する注意を改めて喚起するのです。ある鉄砲撃ちは、自分がこの任にあったときムクドリの群れに向かって2度発砲したものの頭上へと飛び去られてしまったという話を、こう締め括っています。「…けど1羽も落とせなかったのよ。狙いがちいとばかり低かったみてえだよ。なんせ、むこうの畑まで行ってみたら半ブッシュほど脚ばっか落ちてやがったからな」。

この文章を書いている私自身もかつては同じ任務に携わっていましたから、決して卑下して言うつもりはありませんが、畑のなかでカラスを追い払う彼

らは、言うなれば動く案山子でした。そのせっかくいる彼らにより多く働いてもらおうという意図から、ときにはフリント拾いが任されることもありましたが、(訳者補記 イングランド南部) 丘陵地帯 (downlands) に特有の浅い表土には無数のフリント石がごろごろ埋まっており、そんな土地での石拾いは、何とも終わりの見えない果てしない作業でした。激しい俄雨にわかあめが降るたびに土は洗い流され、畑の表面には新たなフリントが姿を現します。ですから、年輩の農夫のなかには、フリントが他の作物と同じように数を増やすばかりでなく大きく成長するものだと信じ込んでいる者すらいたようです。大きめのフリントはいずれも手作業で掘り出され、種箱に集めては、何れの耕地の端にも設けてあった専用の集積所に運ばれ、そこにまとめて山にしてありました。集められた石は、あとから荷車で運び出され、丘と丘を結ぶでこぼこの車道や荷馬車道を修繕する材料として用いられました。

齢よわいを重ね、リウマチのため手足が不自由になった祖父にまだこなすことのできた仕事のひとつが、この鳥おどしでした。祖父は、馬に引かせた荷車で畑の真ん中まで連れて行ってもらい、いつも前装式の銃とクラップーズを携えてお気に入りの椅子に腰掛けていました。その傍らにはビールが1杯と、紅白の水玉模様のハンカチに包まれたパンとチーズが置かれていました。夕食時になって迎えに来てもらうまで一日中、祖父はそこに座っていました。長年に亘り (訳者補記 農場管理人 (bailiff) として) 1,000エーカーの耕地に50人以上が働くこの大農場の運営という重責を担い、頑丈なコブ種の馬に跨ってこの土地を駆け巡ってきた祖父でしたが、恨み言ひとつ言わず自らの老いを受け入れ、この大役を退いた後には、「スクルーズ (screws) [訳注 リウマチを指す方言]」を患ったこともあって、農場で最も取るに足らないこの仕事を引き受けたのでした。給金すら支払われませんでした。身体が言うことを聞かなくなっても尚、今もって意味のある仕事をしているのだと思えることが、祖父には充分な報酬なのでした。その頃、私はまだ5歳かそこらでしたが、時々許しを得て祖父についていくことができました。手に

は、父が作ってくれた極小サイズのクラッパーズを携えていました。大きな本物のクラッパーズを扱える「一人前の男」ではまだありませんでしたからね。ミヤマガラスを祖父が撃ち落とすたびに私は走って拾いに行き、祖父に届けました。祖父はこれを受け取ると、藁葺き用の竿の先に結わえ、私に少し離れたところへ行ってこの竿を地面に突き立てるよう言いました。哀れ不運なこの鳥は、逃げ去った仲間たちに対する残酷な見せしめとして、この絞首台の上で揺れ動くのでした。

祖父が次の歌を唄うのを初めて聴いたのは、このとき、この場所でのことでした。

「カラスが1羽、木の上に止まった。

そして、そいつはとてつもなく黒かった。

ほんとに、この上なく真っ黒だった、、、」

私の父ジムは、17歳になる頃には臨時雇い〔<sup>註</sup>フリーランスのようなもの〕の車力 (odd carter) として村では少々名を知られるようになっていました。父は自分の馬車を持っていたわけではありませんでしたが、余所の組で余った馬を集めて組んだ臨時の馬車で、ありとあらゆる荷車仕事を手際よくこなしました。牛の飼い葉を運び、藁葺き作業用の水を運び、また、何日も雨が降らず溜め池の水位が下がったり完全に干上がったりしたときには、丘の上の羊たちが飲めるよう水を運びました。重い荷物を積んだ四輪荷馬車の定期便が険しい丘の上り坂に差し掛かる場所では、曳き馬ひを操りました。これは、2頭組みの馬たちの前に追加して繋ぎ、丘の麓から荷馬車を引き上げる加勢をする馬でした。首尾良く頂上まで辿り着くと、父は曳き馬を外し、丘を下って次の荷馬車が来るのを待ちました。

この地域には、海岸沿いの壁面のあちらこちらに採石場が点在していましたが、ときにはこうした採石場から石灰岩を掘り出し、崖の上へ運んで、縁

の手前20フィートほどのところに海岸線と並行して一列に積んでいく仕事を任されることもありました。これは、日夜海辺をパトロールする沿岸警備隊の目印となる石塁でした。月のない夜、石灰岩の白い小山は彼らの持ち歩くランタンの光で微かに輝きましたから、海側にそれを見ていれば、崖っぷちの辺りを歩く際に転落の危険を回避することが出来たのでした。

車力は町から町へと方々へ動き回りましたので、ときには思わぬ掘り出し物に出くわしたり、村では手に入らないようなあらゆる類の食べ物を手に入れるような機会にも恵まれました。ウィールドウンの果樹園では何袋ものリンゴを、ブライトンの海辺ではたくさんのニシンを、そしてこの時期ですと、ニューヘヴンの港に停泊している漁船でホタテ貝を分けて貰うことが出来ました。漁師たちは、いつでもわずか半クラウン【<sup>訳註</sup> = 2 shillings 6 pence = 30pence】で、気前よく麦袋一杯にホタテ貝を詰めてくれましたから、1個当たり半ペニーで5、6ダース分売って元を取ってもまだ充分家族全員で楽しめるぐらいの数が残っているものでした。この値段は、相場の変動を考慮したとしても破格の安さではなかったかと思いますが、ジム曰く、こんなレベルでの取引は「ジェントリ【<sup>訳註</sup>郷士、地主】の旦那方」がその美味しさに気づくまでの話だったそうです。

農場に働く者たちの生活のなかで、ビールは重要な役割を担っていました。別に彼らのことを大酒飲みの連中だと言おうとしているわけではありません。ビールは日常的な飲料のひとつと捉えられていて、年輩の農夫たちほど、干し草作りや収穫の頃の畑でビールが果たす強壯剤としての意味を強く認識していましたから、畑の隅にあるサンザシの生け垣の涼しい木陰に置かれた石製のビール瓶は決して空っぽにしてはならないものでした。何しろ、ほんの一世代かそこら前まで、庶民の間では紅茶というものがほとんど知られていなかったのです。誠実なるイングランドの民の渴きを癒してくれるのは、この世にただひとつ。誠実なるイングランドのビールのみということなのでした。土にまみれる単調で過酷な作業の繰り返しという重荷を両肩にずっしり

感じ始めたら、ビールを口に含みます。すると、全身に新たな活力が<sup>みなぎ</sup>漲り、その力が農夫を次の作業へと駆り立てていくのです。

教会の裏手にあるコート農場でオート麦の脱穀が行われていたある日のこと、ジムは袋詰めされた麦を荷馬車に積んで、村の広場を越えた向かいにある穀倉へと運んでいました。麦袋は、1つの重さが2ハンドレッドウェイト〔<sup>訳註</sup> = 2 × 1 cwt (=112pound = 50.80234544kg) = 約101.6kg〕にもなるもので、父はこれを10袋、馬1頭に引かせる二輪放下車 (two-wheeled tip-cart) 〔<sup>訳註</sup> 大八車のような荷車〕に載せて運んでいました。荷車で穀倉まで運び、間に踊り場のある階段を上る階まで持って上がって麦を移し入れると、父は、空になった10枚の袋をコート農場へ戻しに帰りました。

父はひとりで仕事をしていましたし、喉の渇く力仕事であることはわかっていましたので、少しばかりの「役得」を手にするべく、しばしばちよつとしたごまかしを働いていたそうです。これは当時としてはありきたりのことで、上の方々もたいていは目をつぶってくれていたようです。最初にオート麦を運んだ際、父はなんと、10袋のうち1袋を穀倉のすぐ隣の厩に繋がれていた馬用にと運送屋に売り払い、その日のビール代を稼いだのでした。

農場に袋を返却するとき穀倉から持ち帰った9枚と合算できるよう、父は予め空の袋を1枚必ずこっそり持ち出していました。農場への帰り道には、広場を横切ってラディヤード・キプリングの家の前を上がるのではなく、ブラウの方へと遠回りをし、そこへ立ち寄ってはビールを軽く1杯ひっかけました。最初の一巡でパターンが出来ていますから、その後はすべて同じ行程でその日の仕事を行いました。当時、パブは終日営業していましたからね。仕事を終えて引き上げるまでにジムはこれを11巡こなし、11トンものオート麦を運び、11ポイントのビールを飲んだのでした。これは、誰の目にもなかなか良い仕事と思えるものではないでしょうか。

その夜、ジムが帰宅すると祖父〔<sup>訳註</sup>ジムの父〕が言いました。「おう、おめえ今日はあの倉を上がったり降ったり、たいへんだったらう。ビール1杯やっ

たらどうだ」。ジムは、言われたとおりの階段の下にある樽のところへ行き、グラスに1パイント注ぎました。特に喉は渴いていないなどは口が裂けても言えませんでした。どこでビール代を手に入れたのかと祖父に怪しまれては困りますからね。ビール好きのジムが、紛うことなき心からの熱い思いを込めてこの歌を唄うことが出来たのは当然のことでした。

「オレが今から唄って聴かせるのはうまいエールの歌、  
そして、うまいエールにオレはいつも首っだけ。  
グラスの縁までなみなみと注げば、もうたまんねえ、  
だから、注いでくれりゃあどんだけだって飲むぜ。  
ああ、うまいエールよ、愛しいやつよ、  
明けても暮れても、おまえはオレの喜びさ」。

3月は、春の大掃除が行われる時期という意味でも仕事の嵩む月でした。大掃除は、人々の暮らす平屋の田舎家ばかりでなく、農場の建物でも同じように徹底的に行われました。どの牛舎にも厩にも白い石灰塗料が吹きつけられました。祖母は、この作業をしている少年を見かけるとバケツ1杯抱えて家に来るよう言いつけ、台所や便所にこれを吹きつけさせました。ジムは当時、便所のことを「肥溜め (dunnick)」と呼んでいたようですが、これは庭の小道を下った先に、隣家の便所とひとつ屋根の下に背中合わせのような格好で組み合わされて建っていました。内部には骨組みとなる十字に組まれた大きな梁が仕切り壁を突き抜けていて、その両端にはそれぞれ箱状の木製便座が乗り、すべてが一体化した構造となっていました。長年使われてきましたから少々ゆるみが出てきていて、そのせいで便座に腰を下ろすとシーソーのように上下しました。ジムはそこに暮らしている頃、壁の向こうに誰が座ったか、その重さからはっきり判別することが出来たと言います。隣家の姉妹の何れにもなんとか勝ることが出来たようですし、全体重をかけて重く腰掛ければ、隣のおばさんですら空中に持ち上げておくことが出来たのだそうで

す。しかし、おじさんの登場となるとジムの優位は崩れ去り、便座は突如として2インチほども持ち上がりました。父はこう続けます。絶対に便座の下に指を入れちゃあダメだ。おっさんが先に立ち上がったら、便座がストンと落ちて指を挟まれちまうからな。

#### 【4月】

「春になると鳥たちはさえずり  
 子羊たちは跳ね回ってベルの音を響かせ、  
 気高き光を放つこの命の輝きに心も高ぶる。  
 サクラソウの花も、キバナノクリンザクラも、  
 少し離れて可憐にひっそりと花開くスマレも、  
 イバラの茂みに輝くバラも  
 そして、私たちを楽しませてくれたラップスイセンもみな、  
 いずれ花びらを落とし朽ちてゆく」。

「春になると」

農村の4月は、各家庭で庭いじりが盛んに行われる時期でした。平日、厩や農場での仕事を終えると、田舎家の主たちは、浮いたわずかばかりの明るい時間をなんとか最大限に活用しようと、夕食前の時間すら惜しんでまっすぐに庭へと足を運ぶのでした。鋤や熊手が沈みかけの日の光に輝き、鋤き返したばかりの土の匂いと、充分に腐敗の進んだ厩の肥やしの芳醇な香りを乗せた空気は、何とも心地よいものでした。夕暮れ時は風いで静かで、庭いじりの手を休めて真っ黒に煤けた陶製のパイプに火をつけると、煙草の青い煙が渦を巻きながら上とへ向かい、新芽をつけ始めたオオカエデの低い枝の下で幾筋か水平の層を成して溜まっていました。かたや同じ木の一番上の小枝からは、宵の嘆願を唱えるクロウタドリの澄み切った甲高い声が絶え間なく降り注いでいました。

種の植え付けが終わり、きちんと整えられた家庭菜園の姿は、こうした庭

いじりがある種の信仰のようなものにもとづいた行為であることをはっきりと示していました。4月に、定められたやり方で種を蒔いていくという実利的な目的のために腰をかかめている男は、同時に嘆願の祈りを捧げ、7月の実りと豊作を見据えているのです。腰を伸ばして起き上がり、振り返ると、きれいに熊手をかけた畑には、溝を刻んでまっすぐきちんと均された畦が幾列か並び、それぞれに目印として空になった種袋をかぶせた棒が突き立ててあります。そんな光景を眺めていますと、脳裏には、やがて芽吹くソラマメとサヤエンドウの新芽が何列にも並ぶ様子や、自らの暮らす田舎家の壁に何本も張られた長縄につるされ、9月の陽光の下で熟していくたくさんのタマネギの姿が浮かぶのでした。為すべきことをきちんと行っていけば、神は決して自分を落胆させることはない、彼はどこかで固く信じています。どのような季節が巡ってくるのか誰にもわかりません。日照りが続けば果実が熟すには好都合ですし、長雨は根菜の成長を促すものですが、とにかく如何様に転んでも何れかの作物は必ず収穫出来ると彼は確信しているのです。

種蒔きから干し草作りくらいの時期についてジムはほとんど語っていませんが、こんな記述は見受けられます。

種まきが終わると、広い休耕地を山ほど鋤き起こす仕事が残っていた。アブラナの種まき支度だ。そしてイースターの頃になると、聖金曜日にはコーン・ローリング (corn-rolling) って言って、小麦の作付けのために土を起こしたもんだが、こいつはおかしな日で、教会に行くやつもいれば、ウサギ狩り [訳註 原文では sport。巣穴にフェレットを放って追い込ませ、網などで捕らえる、この時期の伝統的な狩り。] に出かけるやつもいたり、なかには丸一日休養ってやつもいた。

土起こしには、よく2頭1組の若い去勢牛が使われました。肥えた耕地の表面に固まった土を、ローラーだけでなくその蹄でも非常にうまく砕いてくれると考えられていたからです。ジムがまだ車力見習いだった頃、本人は随分

とイヤだったようですが、ビル・リード親方との仕事から外れて、村に2人いた牛方 (ox-man) のうちのひとり、ルーク・ヒルマンのおやじさんところで働くよう言いつけられたことがありました。おやじさんの暮らす小さな田舎家は、ソルトディーン谷の上があったところで3つの農場が境を接するちょうど真ん中のニューランズにありました。大きな納屋に家畜置き場まで備えた立派なつくりの家は、このあたりではまず他に類を見ないものでした。ニューランズはかつて私の家系の先人たちが耕作していた土地で、私にとって曾祖父に当たるオネスト・ジョンは、1817年にそこで生まれています。離れには牛小屋もあり、そこにルークが所有する8頭の去勢牛が繋がっていました。牛たちの名は、タークとタイガー、ラークとリネット、トロットとトラヴェラーに、バックとベンボウといました [訳註 それぞれの組の牛の名は頭韻を踏んでいるだけでなく、牛たちの横を歩く牛方 (もしくは見習い) に近い方に単音節、遠い方には2ないし3音節の名をつけるのが慣例であった。以下挿話参照。]。仕事にかかる際、牛たちは軛くびきで2頭1組に繋がれました。軛とは、手作業で削り出された木製の素朴な農具で、しっかりとした檜の木の下に、2頭の牛たちの頭をそれぞれ通して首を取り囲むビロードトネリコの木材を弓状に彎曲させた部品が2つ組み合わせられていました。その形状はサクソン人の時代から変わっておらず、14世紀に作られたラトレル詩篇の挿画で色鮮やかに描き出されているその姿は、1890年代に農村で用いられていたものと瓜二つでした。

ジムが毎朝一番にやらなければならなかった仕事は、牛舎から「糞を掻き出し」、肥やしを外に積み上げて、最初の飼い葉を与え、その日の仕事に備えて牛たちを軛に繋ぐというものでした。牛たちはいつも同じ組み合わせで軛に繋がれました。そうすることで一緒に作業を行うことに慣れさせるためです。ただジムはすぐに、雄牛を軛に繋ぐ作業は馬に馬具を付けるのとは大違いだということに気づきました。この仕事を始めたまさに最初の朝、大変な目に遭ったからです。

「ダメだダメだ、坊主！」ってルークが怒鳴りやがる。「そうじゃねえって。おめえ、あいつらの面、あべこべに並べてやがるじゃねえか。ルークが手前でリネットが向こう。名前の短え方が左で長え方が右。そんなこともわかんねえのか、このバカ野郎」。

「こいつらにゃ名前なんぞ書いてありませんよ、ヒルマン親方」。  
「このガキゃ生意気なこと言いやがって。親父に言いつけるぞ」。

鋤引きの作業では、ルーク親方が鋤の柄を握って操作し、その間、ジムは、およそ9フィートほどの長さのあるトネリコかハシバミを削りだした竿を突き棒として携えて牛たちの傍らを歩きました。突き棒の先端には、短く切った針金か細長い馬の蹄（訳者補記の欠片）が打ち込まれて鋭く突き出しており、まるで鋭く研がれた鉛筆のような格好になっていました。ただし、実際にこれを使わなければならないような場面はあまりありませんでした。脇腹をこれで突かれるような目に一度でも遭えば、牛たちは、突き棒を背中の上に横たえたまま大きな声で指示を出すだけでも、大方求められた通りに仕事を行いました。

牛たちを左回りに反転させる際には、自分に近い方の牛に、大きな声で「ハイ、ターク、ハイ」と命じて先導させ、右に反転するときには、「カップ、カップ、タイガー」と言いながら転回させました。牛たちは非常によく働いてくれましたので、その安定感のある強い牽引力によってとてつもない量の荷を動かすことが出来ましたが、「しっかりやれや」とか「おらおら」のような必ずしも上品とは言い難い励まし声をかけ続けておかないと、徐々に足の運びが鈍くなり、終いには立ち止まってまったく動かなくなってしまうのでした。

ルーク親方はがっしりした気怠げな感じの人物で、その動きは彼の飼う牛たちの速度にぴったり合っていました。ジムは、ルーク親方がときどき、鋤刃の持ち手を握り、片足を畦溝に入れて牛たちの後を歩きながらうとうと眠りこけているのを小馬鹿にしていました。ある日、コンプトの畑で鋤を引

いていたときのこと、少々腹部の膨満に苛まれた親方は、胃にまでかかるその圧を一気に解き放ちましたところ、それはそれは強烈な音が朝の空に響き渡り、そのせいで牛たちは完全に脚を止めてしまったのでした。この出来事についてジムはこんな風に語っていました。「そうさなあ。牛のやつらあ、とにかくルークが『どうどう (whoa)』って言ったって思ったんだろうよ。それで止まったんだ。いかに卑しい牛たちであろうとも、ときに(訳者補記)わざと聞き間違えて脚を止め、小休止を取るなどというはかりごとずる賢い謀を巡らせるほどの知性があると、このとき親方は信じて疑わなかったようです。「さあさあ歩け」と親方は牛たちを怒鳴りつけました。「オレはなんにも言っちゃあいねえ。ちょいと屁えこいだけじゃねえか。それをおめえら、何だか知らねえが知恵つけやがって。学者[訳註]原文 Almanac makers」にでもなんののか」。

ルーク親方は、鋤をかける畑の広さを測って印を付けておくために、いつも突き棒を8フィート3インチの長さに切っていました。畝溝を1本作る昔ながらの鋤は約9インチの幅に溝を掘って行きましたから、畑の端まで行って戻ってくると、18インチ幅の畝溝をこしらえることになります。この幅が1ウエント (went) で、2ウエントが1ヤード、11ウエントが1ロッドという計算になります。11ウエントは言い換えれば5.5ヤードで、突き棒は、このちょうど半分の長さに作られていたのです。ですから、例えば、奥行きが40ロッドある畑を耕す場合には、幅4ロッドについて作業を行えばちょうど1エーカーということになり、この4ロッドの幅を、この突き棒を使って8回その長さで畑に印を付けていだけで測り取ることが出来ました。農夫はひとり1日1エーカーを耕すというのが相場でしたから、これはすなわち、例えば幅44ウエント[訳註 = 4 rods]の畑で奥行き40ロッドないし220ヤードを耕すということなのでした。父の話では、鋤引きを行う農夫は、毎日10マイル以上も鋤の後ろをとぼと歩かなければならなかったのだそうです。

このような作業に纏わる話のなかで最も興味深いのは、1900年に農場で行われていた耕作のやり方が、その方法の細部についても、さらには1日に想

定されていた作業面積ですら千年前から変わっていないという点です。ルーク親方とジムがこなした1日分の仕事を10世紀のサクソン人の大修道院長、エルフリックの会話を引いて比較してみましょう。

「お話し下さい、農夫のお方。どのような仕事をしておいでなのです。」  
「おそれながら修道院長様。一生懸命働いております。夜明けとともに家を出て、雄牛たちを引いて畑へ向かい、軛を負わせ鋤を繋ぎます。どんなに寒い冬の日でも、一度だって家で遊びほうけて過ごしたことなどございません。お仕えする身でございますので。雄牛たちに軛を負わせ、鋤には(歌者補記)固まった土を切っていく) 円盤と(歌者補記)切られた土を鋤き起こしていく) 刃を結わえ付けて、毎日1エーカーは耕さなければなりません。」

「ひとりで行っておるのか。」

「見習いの小僧に鉄の突き棒を持たせて牛どもを引かせておりますので、この者が寒さにしわがれた声を張り上げております。」

「その他にも1日のうちにやらねばならぬ仕事があるのか。」

「もちろん、まだまだございます。桶一杯の飼い葉を牛たちに与え、水をやり、肥やしを運び出さねばなりません。それはそれはきつい仕事です。何しろ自由の身ではございませんので。」

このように千年以上もの間、まったく同じやり方で人は牛と組をなし、まさに今と同じこのサセックス丘陵地帯の土から生活の糧を得ていたのです。しばらくの間ロッチンディーンで暮らしたこともある詩人、アルフレッド・ノイズ氏ほど、このような時の流れに思いを馳せる興味深さを巧みに捉えている人物はいないでしょう。父はこの人のことを良く覚えていました。黒っぽいロングコートを身に纏い、つばの大きな黒いフェルトの帽子を被った非常に堂々たる風貌の人物で、村外れの丘の上を大股で闊歩する姿や、白亜の道を上がった急な土手の上にあるヴィカレジ・レインの隅に腰掛けている姿をよく見かけたそうです。向かいの丘には黒い風車を臨み、南の方には海が

開けて見えるこの高台からは、谷間たにあいにある村全体をきれいに見渡すことが出来ました。氏は長い時間そこに腰を下ろしていることもあったと父は言っていましたから、次の詩を読めばどなたでも、その場所で着想を得たに違いないと思われることでしょう。

空は深紅と黒に染まり、クローバーを運ぶ荷車が  
 真白な白亜の道をゆっくりごろごろ進んでいく。  
 そしてその場で黄金の草に私は身を横たえ、なぜに  
 かくもちっほけな事々が  
 馬具の奏でるチリンチリン、リンリンという音や  
 革の擦れ合うキーキーという甲高い音や  
 人のとぼとぼ歩く静寂が  
 突如として、心に突き刺さるほど鋭く  
 死への途轍もない畏怖の念を抱かせるのかと。

もしかしてもしかすると、今と変わらぬ青い夏空の下、  
 幾百年もの昔、私の寝そべるこの野原で、  
 サクソン詩人のカードモンが、同じ思いに取り憑かれていたかも知れない。  
 荷車に積まれた見事な実りに身を横たえる浅黒く日焼けした農奴、  
 馬具の奏でるチリンチリン、カチンカチンという音や、  
 革の擦れ合うキーキーという甲高い音や、  
 人のとぼとぼ歩く静寂に、  
 思うのだ。そう、思わずにいられぬのだ。  
 人は死にゆく定めなのだ。

ジムが牛たちを率いてひとりで任された最初の仕事は、ハイ・バーンの溜め池の底を固め直す作業でした。池は、言うまでもなく水を抜いて干上がった状態にしてあり、事前に荷車で数回粘土が運び込まれていましたので、まず底に粘土を平たく均してから8頭の去勢牛たちを入れて何度も何度もぐるぐる歩き回らせ、蹄で踏みつけて底土に馴染ませました。牛たちが単調な作

業に飽きてしまわないよう、ジムは、10周するごとに8頭の歩く向きを変え、次の10周は反対回りに歩かせました。通常、牛たちの動きは、ゆったりとしたのんびりしたものでしたが、夏が訪れ、牛たちを狙うウシバエ (prick-fly [訳注 = gadfly]) が飛び回るようになると様子は一変しました。どうやら牛たちは20ヤード以内にこのハエがやって来ると本能的にこれを察知するようで、ここからさらに近づくと、尾を箒のように空中にピンと立て、不安げに目をキョロキョロと動かししました。そして、何の前触れもなく突然怯え上がると、自分が後ろに何を引いているかなどお構いなしに、全速力でその場から逃げ去るのです。ジムは、ヴィカレジ・レインの畑に鋤をかけているとき、一度この暴走に巻き込まれたことがあるそうです。ウシバエがやって来ると、牛たちは鋤も何も一切切引きずったまま逃げ出し、引いた鋤などお構いなしに畝溝を飛び出してイースト・ヒルの坂道を駆け上がりました。その間、幼いジムは、必死で鋤の柄にしがみついていたそうです。鋤が溝に引っかかって牛たちが止まってくれましたから助かりましたが、もしそうでなかったらどこまで行ってしまっていたかわかりません。

ロッティンディーンで使われていた雄牛はウェールズ原産の黒くてがっちりした種で、主にオートのマワラとカブハボタン (swede) という根菜が飼料として与えられていました。これは、オート麦や干し草にマワラまで与えなければならなかった馬を飼うより遙かに安上がりでした。当時、近隣の村には、荷車を引くのにサセックスの赤牛を使っている農場もあったようですが、ロッティンディーンでは使われていませんでした。ロッティンディーンの雄牛はすべて (訳者補記 ブライトン近郊の) パチャムで仕入れたものでした。毎年、牛方は見習い小僧を伴って、自分の所有する雄牛のうち最年長の2頭を含めた4頭を連れて、10マイルほど離れたその村へ赴きました。そして、畑仕事をさせるには年齢的に盛りを過ぎたと思いき2頭をそこで手放し、残った2頭と、手放した牛の代わりに仕入れた3歳くらいの若い雄牛2頭を連れて村へと戻りました。このような牛追いの手法がとられていたのには理由が

ありました。すなわち、若い2頭は、経験豊かな年長の雄牛と一緒にのときの方が2頭だけにいるときより遙かにしっかり歩くということがよく知られていたのです。パチャムで手放した2頭は、それから飼い葉を与えられて体重を増やし、最終的には相応に等級を付けられた牛肉として肉屋の店頭に並びました。老いた雄牛2頭を売り払い若い2頭を入手するこの手続きは、ほぼ等価交換と了解されていました。牛方は、8頭所有する雄牛のうち毎年最年長の2頭を手放し、若い2頭を手に入れて4年間働かせるということを繰り返していましたので、手放す頃には7歳くらいということになります。

こうしてやって来た雄牛たちは、<sup>(訳者補記)</sup>畑仕事だけでなく) 荷車を引いて道を歩く仕事もある程度行わなければなりませんでしたが、蹄鉄を打っておく必要がありました。牛は馬と違って蹄が2つに割れた分趾蹄 (cloven hooves) ですので、蹄鉄 (shoes) も2つずつ打ちます。これを特に牛蹄鉄 (cues) と呼ぶこともありました。牛の蹄鉄打ちは少々手荒なものとなるのが常で、これを行う者にとっては間違いなく危険を伴う作業でした。雄牛は馬と違ってきちんと躰を施しじっと脚を上げておくよう訓練することが出来ませんでしたので、蹄鉄打ちの作業を始める前に脚をロープで軽く縛り、脇腹の方へ押し曲げておくのでした。この作業は、たいていチャロナーズ農場の前にある広場で行われ、その周りにはいつも人ばかりができました。鍛冶屋は、牛の蹄に蹄鉄を打ち付ける専用の釘に前もって油を塗っておくと作業がし易いということを心得ていましたから、その手筈として、釘を豚の背脂の塊に突き刺しておくことがありました。こうしておくと、針山から針を抜き出すように、必要に応じて1本ずつ釘を手にとることが出来ます。平均的な農場労働者にとって肉は週に一度のご馳走でしたから、この作業が終わるといつも、我先にとこの豚肉のかけらを奪い合うちょっとした騒動が起きました。持ち帰って母親にスープの出汁を取るのに使って貰うためでした。当時は、1週間のうち6日は全日働いて、日曜日が丸一日休みというのが通常の労働形態でした。ただし、家畜の面倒を見る人たちはそうは行きませ

ん。羊飼いや牛飼い (cowmen)、車力や牛方などは、日曜日も平日と同じように動物たちに餌をやり、糞を片付けてやらなければなりません。その頃はまだ土曜日の午後を休みにするというようなことは慣行となっていませんでしたが、4月の土曜日のうち1回だけは、午後1時で農場の仕事一切を切り上げ、残りの時間で、地主さんから割り当てて貰った僅かばかりの畑に自家用のジャガイモの作付けを行うのが習わしでした。農場主のブラウンさんは、農夫ひとり当たり8ロッド、見習い小僧には4ロッドを割り当てていただきましたから、これで一家が一冬を越すことが出来るくらいの収量を見込むことが出来ました。祖父はいつも仲間たちと共同でスコットランドに種イモの大量発注をかけていて、その代金は給料から差し引かれる仕組みになっていました。農夫たちには、畑を耕し、ジャガイモを植え付けるために馬と鋤を借り出すことも許されていました。この日は、「イモ植えの土曜日 (Spud-planting Saturday)」と呼ばれていました。数ヶ月の後、収穫期がやって来ると、再び馬と鋤を借りることが許され、農夫たちは各々ジャガイモを掘り起こして袋詰めにし、わが家へと持ち帰るのですでした。

「イモ植えの土曜日」には、「イモ植え上がりの一杯 ('tater beer) [訳註'tater = potato = spud]」をともに味わうべく、ブラックホース [訳註村の中心にあるパブ] のタップ・ルーム (tap room) [訳註(public) bar とも称され、かつては中流階級の寛ぐ saloon/lounge (bar) と区分されていた] に農夫や見習い小僧たちが一同に会する打ち上げの夕べが開かれるものでした。ほんのささやかな打ち上げの会でしたが、誰もが楽しみにしていましたから、この「テイター・ビア・ナイト ('Tater beer night)」は皆が大好きな恒例行事となりました。当時、この店の主は私の大叔父に当たるトミーで、この夜にはカウンターの上に<sup>ほうろろ</sup>珙瑯引きのボウルを置き、客はここに酒代を入れるというのが暗黙の了解となっていました。客は皆、その日の午後、自家用に作付けをしたイモ畑1ロッド当たり1ペニーを投入することになっていましたから、例えば、息子が二人いる農夫の場合、自分の分が8ペンスと、息子

ひとり分が4ペンスですので、合わせて1シリング4ペンスを支払いました。こうしてボウルには瞬く間に硬貨が貯まり、いくつものビア・ジャグ (beer jug) [訳註 日本でいうピッチャー。ここから一人ひとりのマグ (mug = 日本では通常 jug を語源とするジョッキ) に注ぎ分けてビールを飲む。] が店内を巡り始めたのでした。

親しい仲間と美味しいビールを酌み交わすことほど人を饒舌にするものはないでしょう。とりわけ、空を舞う鳥たちや、始終一緒に仕事をこなす馬や牛や羊といった家畜以外誰も話し相手のいない丘の上でひとり、気の遠くなりそうなほどの長い時間まったく口を開かずにいた者たちほど、堰を切ったようにひたすら語り続けるのでした。果てしなく広がる青空の下、丘の斜面でひとり歌を口ずさめば次の仕事への励みにはなったでしょうが、パブのタップ・ルームで気心の知れた仲間たちと煙草の煙をくゆらせながら最高の雰囲気なかで唄う歌は、それとは比べものにならないくらい遙かに心を満たし、活力を漲らせてくれるものでした。何と云っても、例えば、声を合わせて唄うとか、長く延ばしてハーモニーを奏するというようなかたちで多くの後押しが得られましたからね。そんな風にして溶け合った歌声は、しっかりとした太い梁がむき出しになったパブの低い天井の下で大きく膨らみ、歓喜の波動を部屋全体に拡げて行きました。この時節にぴったりの歌は、「緑の木立の傍らで (By the Green Grove)」をはじめたくさんありました。

「ここへ来れば小鳥たちの歌声が聞こえる  
でも、どうかもっとそばへ近づいて、耳を澄ませてみて  
そうすれば、大きくなったとききっとこんな風に言うでしょう  
あんなにきれいな声を聴いたことなんてなかった、  
あんなの聴いたことない、  
あの小枝で囀る小鳥たちの歌声ほど  
麗しい声を耳にしたことはなかったと。」

さらに、恋の歌となると、何しろ季節外れということなどありませんので、数え切れないほどたくさんありました。トミー大叔父が好んで唄ったのはこれでした。

「愛しのモリー、かわいくて元気で明るくて  
5月のナイチンゲールのよう、  
そのまぶたのまわりでは  
やさしいキューピッドが恋の橋渡しをしようとしている。」

一転して、大叔父の唄う「復員軍人 (The Veteran)」が最後の一節に差し掛かる頃には、皆の目に悲しみのダイヤモンドが輝きました。

「老人は心うちひしがれた様子で、こう<sup>つぶや</sup>呟いた。「これが私の墓だ。  
私も友らと逝きたかった」。悲しいかな、そんな望みも失せ果てて、  
老人は苔むした墓石を抱きしめた。叶わなかった死。  
そしてこう言った。  
もはやこの世に私を知る者はない。  
ああ神よ、私のことを覚えておいでですよ。」

しかし、そうした悲しく重苦しい空気は、「サイコーの女 (Wop She Hadity O [訳註Copper Familyの間では“Wop She ‘Ad It-io”とも])」に唄われるお下品なユーモアによって一瞬にしてかき消され、感傷は満面の笑みへと転じたのでした。

「医者に連れてかれたもんで、見せてやったのよ。患部を。  
なのに、あいつらクスリともしやがらねえ。  
おケツ (Sunday face) を見せたっていうのによ。  
ヤツら、オレがおちよくってると思ったのさ。アホか。くそつたれ。」

こっちがおちょくられたんじゃねえか。ケツにテレピン油を塗られてよ。

たまんねえ。サイコーの女だった。いいかい。出会っちまったのさ。  
舞い上がっちゃう。あいつはサイコーだった。

ほんと。サイコーの女だった。いいかい。出会っちまったのさ。  
舞い上がっちゃう。あいつはサイコーだった。】。

【訳注彼女の部屋の窓の下にハシゴをかけての逢引きの最中、足をすべらせて地面に落下し、尻を切ってしまった男の話。因みに二人はその後めでたく結ばれる。】

普段ならパーの方へは顔を見せないバンディ・ロイドのおやじさんが、この催しの夜にはよく村の薬剤師のコウさんと連れだってやって来ました。二人とも昔の歌が大好きでしたので、聴きに來ていたのです。この歌の最後の声が消えて、惜しめない拍手と「いいぞ、最高だ」と互いに名を呼び合う声が静まると、ロイドさんはいつも、「トミー、そこいらの空いたポット (pot)

【訳注 = jug】を全部一杯にしておくれ」と仰いました。そしてまた、縁から泡が溢れんばかりになみなみと注がれたいくつものジャグが店中を巡り、皆の心に新たな喜びを注ぎ込むのでした。トミー大叔父はこの催しの最大の理解者でしたので、いつもカウンターの上に空の1パイントのポットを置き、そのなかに、ニグロの頭 (negroes' heads) を象ったもの【訳注 当時 negro は黒人の呼称として庶民の間で一般に用いられており、また黒人の頭を模した形状のパイプも多く出回っていた。】や、ドングリ型、縞模様のもので、無地のシンプルなものなど、大きさも形状も多種多様な新品の陶製パイプを何本も入れて、「どれでも好きなもん持って行きな」と皆に声をかけていましたし、さらには、歌1曲を最短時間で唄い切った者にビールをポット1杯進呈とも言っていました。ジムはよく次の歌を早口で唄って、これに挑戦しました。

「さあて、お相手さがしてるお前<sup>めえ</sup>ら  
嫁を選ぶんなら慎重にな、  
なんでって、うちの嫁の妹をもらうんじゃ  
お前<sup>めえ</sup>、人生この先、悪魔と連れ添うってことじゃねえか。

20、18、16、14、  
12、10、8、6、4、2、な～し (none)、  
19、17、15、13、  
11、9、7、5、3で、い～ち (one)。」

これがジムの知っていた一番短い歌でした。そしてたいていジムがこの歌で賞品の1ポイントを勝ち取るのです。何しろとんでもない速さで唄えるようになっていましたからね。

このように「テイター・ビア・ナイト」は、間違いなく1年のうちで最も盛り上がる宴のひとつなのでした。